

ドミニコ会士が見た日本の迫害と殉教

滝澤修身

“16th & 17th Century Persecution and Martyrdom as observed
by the Dominicans”.

Osami TAKIZAWA

要 旨

日本では、1587年に豊臣秀吉が伴天連追放令を発布して以来、キリスト教徒に対する迫害は公に行われるようになった。17世紀には、長崎周辺で多くの殉教者が生じた。その中には多くのドミニコ会士が含まれていた。この論文では、長崎で生じたキリスト教迫害と殉教の精神的背景を、ドミニコ会士の記録・書簡から読み解きたい。

キーワード：殉教、長崎、ドミニコ会

(1) はじめに¹

現在までに、長崎のキリシタン史に関しては多くの研究がなされてきました。古くは、片岡弥吉『長崎の殉教者』（1970）を始め、近年では長崎市が刊行している『新長崎市』（2012）、安野真幸『教会領長崎』（2014）などが出版されています。この他、多くの研究書、概説書で長崎のキリシタン史が取り扱われています。しかし、現在までなされてきた多くの研究には一つの大きな問題点・欠落点が見られます。それは、長崎のキリシタン史がイエズス会を中心的に描かれすぎていることです。

実は、長崎のキリシタン布教は、1602年以降は、スペイン系修道会（ドミニコ会、フランシスコ会、アウグステノ会）が参入し、イエズス会も含めて4つの修道会が参加して布教が完成します。スペイン系修道院の活動期間が短かったにもかかわらず、長崎での殉教者の多くがスペイン系修道会員であったことは特筆すべきです。しかし、今までこの4つの修道会の布教を総合的な見地から扱い、長崎のキリシタン史を論じた研究はほとんど存在しません。

¹ 本稿は、筆者が、第36回長崎学一般公開講座で行った講演「ドミニコ会士が見た日本のキリスト教迫害と殉教」の原稿である。

スペイン系修道会を総合的見地から概説的に描き出そうとした著作は、姉崎正治、『切支丹迫害中の人物事績』、国書刊行会、1930.(スペイン系修道会の日本での宣教)、五野井隆史、『スペイン系修道会の日本宣教』、『日本・スペイン交流史』、れんが書房新書、2010年.の2つの著作のみです。しかしそれらの内容は、長崎でのスペイン系修道会の活動を詳しく分析している訳ではありません。

筆者が今後明らかにしていきたいことは、まず既存の長崎のイエズス会布教研究に、スペイン系修道会(ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティーノ会)を組み込んで、布教の様相を総合的な見地から描き直すことです。将来的には、イエズス会とスペイン系修道会による日本全体のキリスト教史との関連で、その中心的存在であった長崎の布教を位置づける巨視的な研究を展開しようと考えています。

筆者は、1999年から2011年までの12年間スペインに滞在し、ヨーロッパに散在する16・17世紀日本布教に関する史料を研究してきました。同時に、上記のスペイン系修道会の問題点を補うべく史料調査を行ってきました。ドミニコ会師であり日本ドミニコ会史研究の第一人者であるホセ・デルガード・ガルシア氏、同会士である故ヘスス・ゴンザレス・バジェス氏の協力も得て、スペイン系修道会の日本そして長崎布教に関する中心的な史料の所在地を究明することに努めてきました。

それらの研究成果をまとめるために、2010年よりホセ・デルガード・ガルシア氏とともにスペイン系修道会でもドミニコ会に焦点を絞り共著を書き始め、現在、スペイン語原稿を完成させています。『日本ドミニコ会の歴史 16世紀～20世紀』という題名のもと、ドミニコ会の日本での宣教方法、19世紀の四国での伝道を中心に分析を行いました。近年中に出版予定です。本論文では、その一部となる「ドミニコ会士が見た日本の迫害と殉教」をテーマの一部を公開してみようと思います。

(2) 歴史的前提条件

ローマ帝国のキリスト教はディアスポラに基礎を置きつつ拡大しますが、その拡大を恐れたローマ皇帝たちはキリスト教徒の迫害を始めます。この時代、ローマ帝国の宗教は多神教でした。さらに、ローマ帝国の国民は、皇帝崇拝を行いました。しかしながらキリスト教徒は唯一神を信仰し、帝国の慣習を拒否し、偶像崇拝を否定します。このキリスト教を、ローマ帝国の人々は、帝国の平和と秩序のために悪影響を及ぼすと考えました。帝国の人々は、キリスト教徒の集団は、秘密の集会を開き、人肉を食べていると噂します。

ローマ帝国では、10度のキリスト教徒に対する大きな迫害が起こったことが知られています。ネロン Nerón の迫害 (61-68)、ドミシアーノ Domiciano の迫害 (81-96)、トラハノ Trajano の迫害 (109-111)、マルコ・アルレリオ Marco Aurelio の迫害 (161-180)、セプティミオ・セベロ Septimo Devero の迫害 (202-210)、マキシミアーノ Maximiano の迫害 (235)、デシオ Decio の迫害 (250-251)、バレリアーノ Valeriano の迫害 (256-259)、アウレリアーノ Aureliano とディオクレシアーノ Diocleciano の迫害 (303-313) の10です。

初期的な段階では、地方で迫害が見られます。しかし、3世紀のデシオの治世から、ローマ帝国は、国策として大規模なキリスト教徒迫害を行うようになりました。こうした状況下数多くの殉教者が現れます。こうした迫害は313年のミラノ勅令まで続きましたが、ローマ帝国の殉教は、他国でもキリスト教徒たちのモデルとなっていきます。

ドミニコ会士の出身地であるスペインでは、4世紀初頭、ディオクレシアーノの治世にサラゴサで迫害が起こりました。ローマ帝国によるキリスト教徒の迫害に対し、サンタ・エングラシア Santa Engracia、他18名のキリスト教徒が殉教したのです。304年には、アルカラ・デ・エナレスで幾つかの殉教が見られます。フスト (7歳) とパストール (9歳) の子供がディオクレシアーノの迫害に対し殉教を遂げました。殉教の伝統は、中世のスペインでも存続します。850年以降、コルドバで殉教が起こりました。852年、コルドバ司教が「コルドバ宗教会議」を開催し、殉教を禁じますが、48名のキリスト教徒が殉教します²。

16・17世紀の日本のキリスト教迫害と殉教は、キリスト教の歴史を振り返っても大規模なものでした。日本では、1587年に豊臣秀吉が伴天連追放令を發布して以来、キリスト教徒に対する迫害は公に行われるようになります。その後、17世紀に入ると、長崎周辺で多くの殉教者が生ずることになりました。その中には多くのドミニコ会士が含まれていることは特筆すべきことです。この発表では、長崎で生じたキリスト教迫害と殉教の精神的背景を、ドミニコ会士の記録・書簡から読み説いていきたいと思います。

(3) 日本におけるキリスト教徒迫害の始まりとその理由

まず、最初に、ドミニコ会士が日本でのキリシタン迫害の起こり、そして展開をどのように捉えていたのかを、彼らの書いた報告書や書簡から読み取ってみたいと思います。1619年10月25日の書簡の中で、ハシント・オルファネルは、日本でのキリスト教迫害の起こりを次のように記録

² Quintín Aldea Vaquero, Diccionario de Historia Eclesiástica de España, C.S.I.C., Madrid, 1973. Gran Enciclopedia de España, 2003. 参照。

しています。彼によると、織田信長がキリシタン迫害を始めたと言います。

「1580年。キリシタンに対する最初の迫害は信長によるものです。彼は天下の主になったので、都の近くの河内国を手に入れようとしてしました。そこには有名な城があって、それは全領土の要衝でありジェスト右近殿南坊がその城主でした。信長は武力でこれを征服することができないので、オルガンティーノ神父とセバ스티アン・ゴンサーレスを囚え、もし城の問題でジェストと協議しないなら釈放しない、と言いました。右近殿ができないと回答したので、信長はもし降伏しないなら神父たちがその償いをしなければならない、とジェストに申し送りました。神父らを救うために城が信長の手中に渡されました。これは(15)80年あるいはその前の出来事であり、それ以後ということはありません³。」

同ドミニコ会神父は、豊臣秀吉による伴天連追放令について触れ、日本でどのように迫害が拡大し始めたのかを記録しています。

「他の迫害は1589年サンティアゴの祝日(7月25日)のことであり、太閤が公の布令によってイエズス会士を追放しました。副管区長はガスパール・コエーリヨでした。如何なる者も宣教師を迎え容れたり匿してはならぬ、違反者は死罪にしその財産を没収する、という布令が出され、船長ドミンゴ・モンテロに彼らを乗船させよと命令されました。また死罪ももとに、彼の国でキリシタンの教えを誰も説いてはならぬ、と命令されました⁴。」

ドミニコ会士アドゥアルテとアロンソ・デ・メナは、1614年の禁教令発布と迫害の激昂についてこう記録しています。

「日本において本年1614年まであった迫害はことごとく緩慢で、殉教者の血が多量に流されることもなく、宣教師は1つの土地を追放されれば他の地方で逃れていく機会があって、その教会の迫害は幼児に対するようなものであった。しかし今年から始められた迫害は全国的なもので、人々は大声をあげて騒ぎ立て、企画した効果は上がらなかったけれども彼らは教会を破滅させようとし、全国の諸大名がこれに加わり、それを貴人・裁判官・学者が援けた。……こうして今年の一月初めに日本全国の宣教師全員の退去を命じ、殿すなわち諸大名に、それぞれ自領内の司祭や修道士を集め、これをよく監視して長崎の港に送り届けこの迫害の最も主要な策謀者たる奉行・左兵衛(長谷川)に引き渡し船に載せてマカオからマニラへ追放し、一人も日本に残らぬよ

³ 「フライ・フランシスコ・ウルタード神父宛、日本の諸事に関する報告」、ホセ・デルガード・ガルシア編注、佐久間正訳『福者ハシント・オルファーネル・書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1983、161 162ページ。

⁴ 前掲書、162ページ。

うにし、彼らが退去したならば教会堂を悉く取りこわし、ロザリオ・御絵・アグヌスおよび諸聖遺物をキリシタンから取り上げ、彼らを棄教させ偶像を崇拜させよ、と命じた⁵。」

「この数年間に起こった苦しみや迫害の原因はことごとくその当時生存していた2人の身分の高いキリシタンから生じています。一人は修理殿（有馬晴信ドン・プロタシオ）という有馬の殿で、もう一人は内府様の秘書・上野殿（本田正純）の側近大八パブロというものです。

有馬殿はアンデゥレース・ベソアの船の事件ののち野心を抱いて、結局はイカロのように領地と生命を失いました。皇帝（将軍）はその息子ドン・ミゲール左衛門（有馬直純）に孫姫（国姫）を妻として与え、彼はそれを受けてすでに結婚していた正妻（ドーニャ・マルタ）を棄てました。

大八パブロ（岡本）は有馬殿に、事件ののち間もなく大きな領地、少なくとも肥前（佐賀）の大名のもとであり私たちの教会のある藤津の領地が与えられるだろうと、話しました。それを交渉するために大八は多額の金を有馬殿に出させましたが、それを将軍に全く渡しませんでした、結局彼らは長い間自分のものになると考えていた土地を肥前の大名から取り上げる為にあらゆる策略を用いました。終にそれが内府の耳に入り、悪い処置であり数多の混乱の原因になると考えたけれども、大八を火刑に処し有馬殿はその野心・狂気の故に斬首を命じ、息子（ドン・ミゲール）には棄教を命じました。息子は平然と棄教しました。

（家康は）これによってキリシタンに対して甚だ悪い感情を抱き始め、彼らは反逆的な悪人であると思われたし、また何年か前にアグスティン摂津守（小西行長）というキリシタンが彼に反抗した主要な人物の一人であったので、それらが合わさって内府の心を動かし、キリシタンを一挙に滅亡させるに至りました⁶。」

また、アドゥアルテは、キリシタン迫害の理由は、ウィリアム・アダムスが家康にスペイン人を悪く吹き込んだからだと記録しています。

「（家康は、ウィリアム・アダムスという邪悪な一イギリス人異端者の言葉に耳をかけた。）……スペイン国王が諸国を征服する為に行う方策は、兵士の通路の地ならしをするためにまず宣教師を派遣することである⁷。」

アドゥアルテに従うと、徳川家康によってなされたキリシタン迫害は、息子の徳川秀忠にも受け継がれたと記しています。

⁵ ホセ・デルガード・ガルシア編注、佐久間正・安藤弥生訳『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、カトリック聖ドミニコ会ロザリオの聖母管区、1990、179ページ。

⁶ ホセ・デルガード・ガルシア編注、佐久間正訳、『福者アロンソ・デ・メーナ。書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1982、113ページ。

⁷ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、165 166ページ。

「(家康の息子秀忠は)江戸や都のような彼がとくに直轄している土地および上と称ばれる地方において、キリシタンを激しく迫害し始めた。そこでは、キリシタンが再び圧迫されて、殺された者も追放される者もいるし、その他の者もみな威嚇された⁸。」

更に、徳川秀忠のキリシタン迫害も、三代将軍徳川家光によって継承されたと記されています。

「(家光、そして).....上に立つ幕府の人々は、彼らの間で平和を維持するためにひたすらキリシタンに戦いを挑むことに決めた。武器のない人々に対する戦いであるから、全国がキリシタンの血の海になった⁹。」

ここで、ドミニコ会士が分析した日本でのキリシタン迫害の理由を簡潔にまとめてみたいと思います。彼らによると、織田信長がキリスト教徒の迫害を始めたと言います。その後、豊臣秀吉が「伴天連追放令」を発し、公式にキリスト教迫害を始めました。しかしながら、迫害の規模はそれほど大規模なものではありませんでしたが、徳川家康の治世に入り、キリスト教徒迫害が強化されます。1614年には、キリスト教が全面的に禁止されることになりました。この迫害の理由は、キリスト教徒の岡本大八の賄賂事件とイギリス人によるスペイン人に対する中傷でした。その後、家康の後継である家忠、家光によってキリスト教徒迫害は継承されていきました。ドミニコ会士の分析は、大雑把ではあるが、迫害に関する歴史的な事実を冷静沈着に捉えているものと言えるでしょう。

(4) ドミニコ会士の見た日本でのキリスト教徒迫害の精神的土壌

ドミニコ会士の報告や書簡に従うと、彼らは日本でのキリスト教徒迫害をローマ帝国時代のキリスト教徒迫害のなぞっていたことが明らかになります。ドミニコ会士であるハシント・オルファネルは、日本のキリスト教徒迫害を次のように記録しています。

1615年の九州での迫害は、「(ローマの)ドミシアノ皇帝やディオクレシアノ皇帝の迫害に劣らぬほど恐ろしいものであった¹⁰。」

口之津での迫害は「ディオクレシアノの残忍さに劣るとは思われませんでした¹¹。」(1619年10月25日)

⁸ 前掲書、205ページ。

⁹ 前掲書、404ページ。

¹⁰ 『福者ハシント・オルファネル』、63ページ。

¹¹ 前掲書、119ページ。

更に、ハシント・オルファネルは続けている。

「まずあなた方の隊長・師・救世主たるキリストおよびその受け給うた苦しみの大きさに目を向けなさい。それは言葉で説明できるものではなく、その期間は生涯続き、必要とあれば裁判の日までその痛みを受けたのであり、人類全体のために苦しんだというあなた方の一人ひとりのために苦しんだことである。このほかにもあの聖人たち、彼らの大きな苦勞・迫害やあの長い殉教をごらんください。そのあとの300年にわたる初期教会時代の残忍な長い迫害、さらにその後には生じたあらゆる種類の残忍きわまる異状な拷問、それをあらゆる国で教皇・司教・司祭・老若男女あらゆる人々が数かぎりなく受けたのです。もしこれだけでは未だ足りないで、「それは昔のことであるし、日本人は弱い」と言うならば、現代のあなた方の国の人々をごらんください。あなた方の目の前でスペイン人、日本人の神父や俗人、あなた方の親戚・友人・知人がある者は殺され、ある者は投獄され或いは追放されています¹²。」(1621年9月)

他のドミニコ会士であるフランシスコ・モラレスは興味深い記録を提示してくれます。彼は、スペインでのキリスト教迫害の事例を挙げ、日本のキリスト教徒は苦しみの様子を捕らえています。

「あの痛みをもって十字架に釘付けされ給うたキリストを見ると、ここは牢獄ではなく娯楽場です。聖ユスタとルフィナの牢獄はセビージャにあり、それは湿気のある岩で作られた洞窟です。しかしここは明るくて、庭がしいてあります。聖レオカディアについても、彼女が狭い牢獄で苦しみのうちに死んだ、ということが書いてあります¹³。」(1619年5月8日)

当時のドミニコ会士の記録には、「日本のキリスト教徒は、迫害されたが、最終的には幸福感をもってこれを受け入れた。」という記録が多くみられます。ここでそれらの記録を紹介してみましょう。

「今キリストの為に痛みを受けて始めて、真実の私の幸せが始まったのであり、その聖なる名のため焼かれるとき、その幸せは完全なものとなる¹⁴。」

「こうして敵は、匿れて歩きながら血液のようにキリシタンに生命を与えている宣教師を追撃

¹² ホセ・デルガド・ガルシア編注、佐久間正訳、『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス、書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1976、90-91ページ。

¹³ 『福者フランシスコ・モラレス、書簡・報告』、153ページ。

¹⁴ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、300ページ。

した。しかし流された血は生命を増やし、初期教会時代の殉教者に見られるように、その血は灌漑として役だった¹⁵。」

「若い、か弱い少女たちや聖クレメンテのような人に、あれほど多くの、あれほど異常な長年にわたる苦しみを耐え忍ぶ力を与え給うた主と優しいイエスは、あなた方にひたすら希望を主におくならば、必ず多力をお与えくださるでしょう¹⁶。」

迫害を受けてもなお幸福感を感じるというこの精神的土壌は、どこから生じたものだったのでしょうか？何か精神的な支えがなければ、これほどの迫害には耐えられないはずです。筆者は、聖書の次の言葉を引用しようと思います。

「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであやゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の予言者たちも、同じように迫害されたのである¹⁷。」

それは、イエス・キリストの山頂での説教から生じているのではないのでしょうか。この章で明らかになったことは、17世紀のドミニコ会士たちは、日本でのキリスト教徒迫害をローマ帝国時代、初期教会でのキリスト教迫害になぞって理解していたということです。また、日本にやってきたドミニコ会士の出身国は、スペインであったことから、多くのドミニコ会士が、日本でのキリスト教徒迫害とスペインでのキリスト教徒迫害を関連付け理解しています。日本で迫害を受けたキリスト教徒達は、幸福の念さえもってこれを受け入れたようですが、この精神的支えは、イエス・キリストの山頂の説教であったと推測できます。このように、日本のキリスト教迫害には、カトリックの伝統的な精神が流れていることは事実です。筆者は、初期キリスト教会からの精神的流れが存在することは否めないものではないか、と判断します。

(5) 追跡者

ドミニコ会士の記録に従うと、日本に迫害が拡大していくと、キリスト教徒に対する追跡者が多く現れてきたことが理解できます。追跡者は、群れを成してドミニコ会士や日本人キリスト教徒を追いかけたようです。彼らは、槍、火縄銃、弓、刀をもってキリスト教徒を脅かしました¹⁸。

¹⁵ 前掲書、404ページ。

¹⁶ コジャーダ、『日本キリシタン教会史・補遺』_A、雄松堂書店、1980、44ページ。

¹⁷ 新約聖書、マタイ、5.11-12、日本聖書協会、2001、聖書。

¹⁸ 『福者フランシスコ・モラレス』_A、57ページ。

ある時は、海辺にさえ彼らを追いつめます¹⁹。ハシント・オルファネルの1615年3月8日の書簡は次のように記録しています。

「(役人は)あらゆる悪魔の傲慢さを以って聖人すなわち殉教者に、キリストの教えを棄てるかどうか訊ねました。棄教すると答えるに決まっていると考えたのですが、それは両手をもって天を取ろうとするようなものです。それで彼らの希望どおりの回答をしないと、ただちに母親から生まれたときのように彼らを裸にして腕や手を後に縛り、棒で殴打し顔を踏みつけ、神を讃えたイエズス・マリアと称えると黙らせるために尖った棒を口の中に押し込み、そののち残忍きわまる拷問を加えました²⁰。」

また、同書簡には、次のように記されています。

「1614年12月20日木曜日、殆ど朝から日没まで先ずこの二人の裁判官は昨年取り毀した教会の跡にいて、市民を一人ひとり呼び出し「棄教するか」と訊問しました。聖なる殉教者はただ一人で、槍や鋒槍その他の拷問の道具をもった兵の輪の中に出て行きました。棄教すれば密かにこれを帰らせ、棄教しなければ直ちに一糸まとわぬ裸体にして棒で殴打し、雑巾の如く扱い踏みつけ引きずりまわすなど、台下の考え得るすべての残忍なことをしました²¹。」

(6) 変 装

17世紀のドミニコ会士の記録によると、ドミニコ会神父は日本人による追跡から身を隠すために、変装したという事実が明らかになります。ある時は、ドミニコ会神父は、日本人の服装に着替え、身を隠したり²²、時には、刀をもって武士の格好をしました²³。この他、商人や船乗りの格好に変装したという記録も見られます²⁴。

(7) 逃 走

17世紀のドミニコ会の記録に従うと、同会の神父たちは、日本人の追跡者からあらゆる方法で

¹⁹ 前掲書、57ページ。

²⁰ 『福者ハシント・オルファネル』、62ページ。

²¹ 前掲書、63ページ。

²² 前掲書、142ページ。

²³ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、341ページ。

²⁴ 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス』、80ページ。

逃走していたことが理解できます。通常は、山に逃げ込む²⁵、洞窟に身を隠す²⁶、農民や牧舎の谷に逃げ込む²⁷などしました。時には、山中の小川が流れる低地に身を潜めたこともあったようです²⁸。

(8) 宿 主

多くの日本人、特にキリスト教徒が、ドミニコ会神父たちを彼らの家に匿ったことが、当時の記録から明らかになります。実は、迫害下でもドミニコ会士たちが宣教を続けられたのは、彼らの宿主のお蔭だったのです。長崎の村山等安一族は、ドミニコ会神父に隠れ家を提供しました²⁹。各家主は、追跡者が神父たちを見つけないように隠れ部屋や仕掛けを作ったようです。例えば、多くの家には、壁に隠れるための穴があったり、神父たちを隠すための箱があったと言います³⁰。こうした努力にもかかわらず、多くの場合、神父を匿った宿主たちは、捕縛されることが多くありました³¹。

(9) 密 告 者

当時のドミニコ会の記録から、江戸幕府が、ドミニコ会神父やキリスト教徒を発見するためにありとあらゆる方法を使ったことが明らかになります。密告制度もその一つでした。具体的には、役人たちは、ドミニコ会神父の似顔絵を描き、町中に貼りました³²。また、幕府は報奨金制度を使い、隠れた神父やキリスト教徒を捕えました³³。これを記録した、次のような文章が見られます。

「広場で公衆の面前に150ペソの価値の銀の延棒30本を板台の上に置くことで、そこには次の言葉が書いてありました。「この町で盗みのため徒党を組んで放火した者を訴えた者に、この銀を与える³⁴。」

²⁵ 『福者ハシント・オルファネール』_△、67ページ。

²⁶ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』_△、180ページ。

²⁷ 前掲書、299ページ。

²⁸ 『福者ハシント・オルファネール』_△、138 139ページ。

²⁹ 前掲書、142ページ。

³⁰ 『福者アロンソ・デ・メナ』_△、201ページ。

³¹ 『福者ハシント・オルファネール』_△ 138 139ページ。

³² 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』_△、405ページ。

³³ 『福者ハシント・オルファネール』_△、90ページ。

³⁴ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』_△、148ページ。

報奨制度のうわさが広まると、多くの日本人が密告を始めます。彼らの中には、キリスト教徒さえも含まれることがありました。フランシスコ・モラーレスは、大村で密告者を次のように記しています。

「大村の殿の家来は長崎に来て、聖職者を探す為に悪魔のような策略を用いました。例えば或る家に病人がいて告解を望んでいると嘘を言い、修道士が告解を聴きに行くと捕らえようと企みました。また彼らは良心のない人々に金を渡して神父を探し出し、ユダのように裏切らせ訴えさせました³⁵。」

キリスト教徒による密告は、同胞たちに反感を招くことがありました。興味深い記録が残されています。長崎の床屋であるアントニオは、密告を行った或るキリスト教徒の髪を切ることを拒否したそうです³⁶。

(10) 尋問者

幕府の役人は神父たちを捕らえると、尋問を始めます。具体的には、役人たちは、神父の名前、年齢、所属する修道会、どこで働いたか、何故日本にやって来たか等を尋問しました。捕縛された日本人に対しては、「転ばぬか（棄教しないか）」と質問するのが常でした。もし、キリスト教徒が転んだ場合、家に帰ることが許され、時には報奨が与えられました。

キリスト教徒の詮索が拡大するなか、幕府は「踏絵（絵踏）」を考案します。周知のように板にキリスト、マリアなどの描かれた銅板をはめ込み（初期の段階では、紙や板が使用された）それを日本人に踏ませるといったものでした。踏絵は、キリスト教徒たちにこの上ない、精神的苦痛を与えます。興味深いことですが、一枚の踏絵に使用された絵は、ドミニコ会の「ロザリオの聖母」が原画となっています。これほど、ドミニコ会の長崎地方における影響力は強かったものと考えられます³⁷。

(11) 悲惨な出来事

怖い迫害が続く中、日本人キリスト教徒達は悲惨な出来事に遭遇することになります。幕府の禁教政策に対して、キリスト教徒達は教会を破壊しなければならないこともありました。

³⁵ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、47ページ。

³⁶ オルファネル、『日本キリシタン教会史』、雄松堂書店、1977、268ページ。

³⁷ ホセ・デルガド・ガルシア編集、岡本哲男訳、『フアン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ、伝記、書簡、調査書、報告書』、聖ドミニコ修道会、1986、155ページ。

「事態が切迫して来たので、彼らの間で教会や修院を焼くことが相談され、修道士の間ではミサ用具やスペインの葡萄酒を地中に埋めることがすでに協議されていた。それは修院が焼かれた場合にも、ミサを捧げることができるようにと、というためであった³⁸。」

更に多くのキリスト教たちは、幕府の禁教政策で、家族を崩壊させられます。ドミニコ会神父の記録に記されている史実を幾つか紹介しましょう。地位が高く薩摩国で多くの俸禄を受けていたキンド・チュンジロ・ヤコボという領主は200人以上に上る全員キリシタンの家臣と共に数多の苦しみを受けました³⁹。1614年の迫害でジェスト高山右近は、棄教しないということで全財産を没収され、マニラに流されます⁴⁰。長崎代官の村山等安もひどい仕打ちを受けました。等安は、ドミニコ会と友好関係を持ち「長崎のキリシタンの保護者」となりました。1619年、役人たちが村山等安宅に突如侵入し、全ての家財を没収しました。彼の家の中には牢が作られ、彼の妻、息子たち、孫たちが投獄されます⁴¹。更に彼の息子村山アンドレス徳安が捕縛された後、彼の家族は全財産没収されました⁴²。こうした状況下、多くのキリスト教徒の家族が財産を没収され、追放されてゆきました⁴³。ハシント・オルファネルの書簡には、次のように記録されています。

「すなわち棄教しないと直ちに妻子を奪い、母親から生まれたときのようにこれを裸にし、公の街路を引き回したのち永久に奴隷とし、若い娘は娼家に入れてしまうことです⁴⁴。」

(12) 牢 獄

長崎周辺には、キリスト教徒の捕縛者を投獄させるための重要な牢獄が3つありました。鈴田、大村、壱岐の3つです⁴⁵。特に鈴田の牢獄が有名でした。この牢獄に関しては、多くドミニコ会士が記録を残しています。まず最初にトマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガが残した記録を通じて、鈴田牢建設時より、1622年までの牢獄の様子を概述してみましょう。

「鈴田牢は、3方を海で囲まれた古い建物であった。牢獄の周囲には柵が敷かれ、3人の武士が常駐していた。当初、多くのキリスト教徒が捕えられ鈴田牢に投獄されると、牢獄内で告解が行われた。この時期の監視人は、キリスト教徒たちに対しまだ緩やかであった。上役の命令で、

³⁸ 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス』、45ページ。

³⁹ 『福者アロンソ・デ・メーナ、書簡・報告』、84ページ。

⁴⁰ 『ファン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ、伝記、書簡、調査書、報告書』、106 107ページ。

⁴¹ 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス』、69ページ。

⁴² 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、207ページ。

⁴³ 『福者ハシント・オルファネル』、101ページ。

⁴⁴ 『福者ハシント・オルファネル』、77ページ。

⁴⁵ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、170 171ページ。

キリスト教徒囚人の勝手な行いを見逃してくれていた。

けれども、1617年9月の末、鈴田牢内でキリスト教徒が甘やかされている噂が広がった。そこで、大村藩の家老が、キリスト教徒で牢獄を見物に来た者達を追い払い、柵を二重にし、柵の間に茨を植えた。全ての人が牢獄に入るために監視人の前を通過しなければならなかった。それでもなお、一般のキリスト教徒たちは、鈴田牢の周辺に見物に集まるのだった。10月の中頃、大村の領主が戻って、鈴田牢の様子を観察した。この領主は、さらに2人の監視人を置くこと、監視人たちの小屋と他の建物を造ることを命じた。その結果、一般のキリスト教徒は、牢獄に近づけなくなった。

11月26日には一人の炊事夫が神父のミサを聴いた咎によって捕縛された。大村の領主は昼食後に鈴田牢に家老を派遣し、牢内を検査してキリシタンに關係ある品々を処分させた。使者は命令をよく遂行し、囚人を外に出して柵にしばり、彼らから書籍・御絵・ロザリオやミサ用品を取り上げ、着の身着のままにした。

1618年1月6日の数日後、長崎の結婚しているキリシタン4人がこの牢獄から釈放された。この者たちは自由の身となり牢内の人々を励ませるといふ立場になると、管区長代理フランシスコ・モラーレスと協力して、できる限りの力を尽くして牢獄内の人々を援助した。

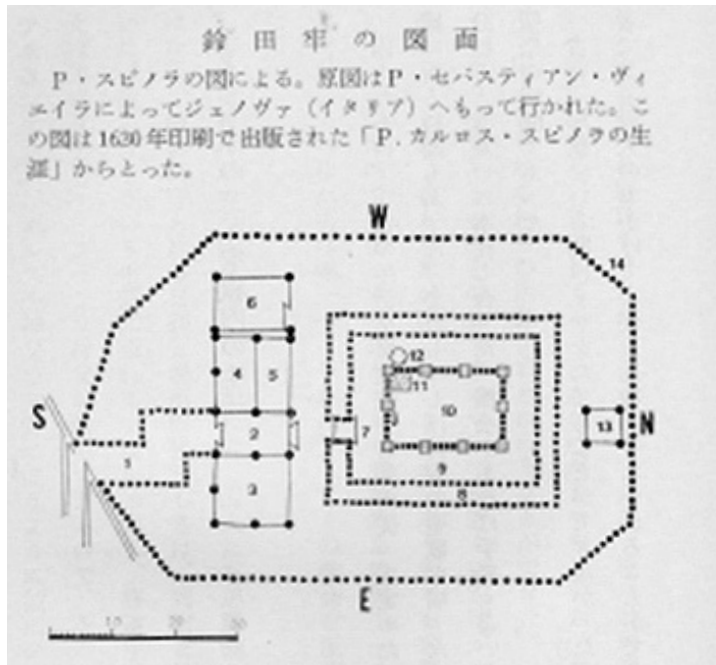
別の年の12月13日夜または14日の朝、ドミニコ会士のアンヘル・フェレーラ、フアン・デ・サント・ドミンゴ、イエズス会士のカルロス・スピノラ、イルマン・アンブロシオ・エルナンデスが鈴田牢に送られた。

7月21日には、囚人全員と牢のわきの檻に入れておいた3人を、鈴田の南方半レーグアの久原にある最近造った建物に移した。彼らは18日後に元の牢獄に戻された。1619年9月から食事が少しよくなった。鈴田牢の生活は、その後、大きな変化もなく単調に過ぎて行った。ただ時折、役人によって検査が行われたり、宣教師やキリシタンの入獄者が増えて、1622年9月9日には狭い鈴田牢に36人の人々が捕えられた⁴⁶。」

続いて、イエズス会士であるカルロ・スピノラ神父が描いた鈴田牢の見取り図を紹介してみましよう。1630年、この見取り図は、『カルロ・スピノラの生涯』中に収録され、出版されました⁴⁷。

⁴⁶ 『福者トマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガ。書簡・報告』、24-27ページ。

⁴⁷ ディエゴ・パチェコ、『鈴田の囚人』、長崎文献社、1967、25ページ。



ディエゴ・アドゥアルテ神父の『聖ロザリオ管区の歴史』の中には、鈴田牢に関する詳細な記述が収録されています。ここでは、その記述を辿りながら、鈴田牢の様子を理解してみましょう。

「牢獄はただ話を聞くだけでも恐ろしいものである。3 尋の長さ、2 尋の幅で高さ1 尋あまりであった。壁は地面に打ち込まれた太い丸太で1 本1 本が接近していた。便所はその牢の中にあっが特別な丸太で囲ってあった。この牢には小さな扉があるのみで、それも囚われ人を入れる以外には決して開かれることはなかった。食事は小窓から差し入れられるが、そこには小さな椀が通る程度の大きさである。食事は塩水で煮た米で、日によっては小さな鰯が与えられ、飲物としては湯が与えられる。病気になっても健康の者と異なる特別な者は与えられなかった。

これだけで満足することなく、暴虐者は酷しい罰のもとに衣類の洗濯を禁止し、物を書くための用具や小刀・鉄のような刃物をもつことも許可しなかった。だから爪や頭髮が伸びて、野獣のように原野を歩きまわっていたときのナブコドノソルのような⁴⁹。」

⁴⁸ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、239ページ。

⁴⁹ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、301ページ。

トマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガ神父は、鈴田牢内での食事について記録しています。

「この時の牢の食事はスペイン人にとっては甚だ粗末なものでした。米飯少量と汁の如ごときものであり、時には鰯のような魚が少し、それも殆んど腐敗しているようなものがついていました⁵⁰。」

鈴田牢内での神父やキリスト教徒達の生活は大変残酷なものでしたが、ドミニコ会士はそれに落胆することはなかったようです。ドミニコ会士たちは、牢内であっても、精神的修養を熱心に行いました。アドゥアルテ神父によると、鈴田牢の生活はまるで修道院のようであった⁵¹、と言います。ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネスは、次のように報じています。

「長い牢獄生活における彼らの霊的修業はその時に応じた祈り、断食、縄苦行及びその他の贖罪であり、それは熱心な修道院内の生活のようでした⁵²。」(25 3 1620)

「牢獄にいた使徒・聖パウロを模倣して真夜中に、マイティネスという聖務日課の祈りをするために全員が起きました。そして断食や苦行などを修道院にいる時と同じようにしました⁵³。」

鈴田牢内では、ドミニコ会神父や日本人キリスト教徒囚人たちは、歌を歌うことに日課として、牢内は歌声で満ちていたようです⁵⁴。彼らは、「子らよ、主を讃めたたえよ」(Laudate pueri Dominum)、「我ら汝デウスのために働かん」(Te Deum laudamus)⁵⁵、「もろもろの民よ、主を讃えまつれ」(Laudate Dominum Omnes Gentes)⁵⁶等を歌っていました。

鈴田牢内では、ドミニコ会士は一般の日本人キリスト教徒、他の修道会の神父たちと友好の絆を強めいったことが、フランシスコ・モラーレスの記録から理解できます。

私たちはそれぞれ異なる修道会の者ですが、この牢内の生活方法は同一の修道会のようです。そのため牢内にいる人々の一人が1週間ずつ牢内の長のように牢生活の責任者になり、それに

⁵⁰ ホセ・デルガード・ガルシーア編注、佐久間正訳、『福者トマス・デル・エスピリトゥ・ナト・デ・スマラガ。書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1984、116ページ。

⁵¹ 『日本の聖ドミニコ～ロザリオの聖母管区の歴史～』、303ページ。

⁵² 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス、書簡・報告』、66ページ。

⁵³ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、100ページ。

⁵⁴ オルファネル、『日本キリシタン教会史』、雄松堂書店、1977、252ページ。

⁵⁵ 前掲書、252ページ。

⁵⁶ 前掲書、320ページ。

よって全員の間に統一・協調が保たれています。断食・苦業・祈りについて修道院における同じ秩序を守っています。その他に私たちは日暮時及び正午にフライ・ルイス・デ・グラナダの教えによって祈り、また真夜中に起きて、燈火がないので夜の勤行はできませんが、詩編を歌い、一時間の祈りを捧げます⁵⁷。(11 8 1919)

ドミニコ会神父たちは、最終的には、鈴田牢の生活に対して誇りを持つようにさせなっていたようです。

「ただこの牢獄内における私たちの喜びや満足は非常に大きくて、ここにいる限りは全地獄の苦しみをもってしても私たちを悲しませたり怒らせたりすることはできないであろう、ということをお願いします⁵⁸。」

大変不思議な事であるが、オルスッチ、アロンソ・メナ、フランシスコ・モラレス、ハシント・オルフェネル、ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス、トマス・デル・スピリット・サント・デ・スマラガといったドミニコ会神父は、鈴田牢内で多くの手紙を受け取り、また多くの手紙を他の人々に送っています。想像しますに、禁教下、幕府の役人、監視人たちがこれを許していたわけがありません。では、どのように、ドミニコ会神父は、手紙のやり取りをしていたのでしょうか。大変、興味のもてることです。その答えとなる、一つの記録が存在します。トマス・デル・スピリット・サント・デ・スマラガの或る書簡には、「本大工町に住んでいる私の旧宿主・三大夫ベント⁵⁹」が、手紙の持ち運びを行ってくれたと記されています。やはり、キリスト教関係者が、秘かに、ドミニコ会神父に手紙を届け、また彼らの手紙を牢内から受け取り出していたのではないかと推測されます。

(13) 拷 問

オルファネルの『日本キリシタン教会史』の中で、徳川家康は次のように命じています。

「なによりも大府様の命令は、決して殺害してはならぬ、ただし諸種の拷問によってキリシタンを残酷に苦しめよ、されば伴天連の尊重する殉教の名声を得ざるように現世に対する無用者となせ、かつ、キリシタンの妻女は娼家に引き立てて凌辱し、その他の息子は奴隷とし、何人たりとも逃亡させるなかれ⁶⁰。」

⁵⁷ 『福者フランシスコ・モラレス、書簡・報告』、174ページ。

⁵⁸ 『福者トマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガ。書簡・報告』、143ページ。

⁵⁹ 『福者トマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガ。書簡・報告』、144ページ。

⁶⁰ オルファネル、『日本キリシタン教会史』、125ページ。

ここでは、ドミニコ会士の史料に見られるキリシタンへの拷問を列挙してみましょう。

「非常に寒い時に多数の男女を藁の俵に入れ長い川につけ込んでおきました⁶¹。」

「一人ひとり脚を二本の木材の間に入れ、はさんだその材木に徐々に力を加えていったので恐ろしい苦痛と共に脛の骨が砕けていきました⁶²。」

「また松の木に吊るされた⁶³。」

「……棄教しない者に対しては手足の指や鼻を斬り落とし膝関節を切断⁶⁴（する）。」

「……両手両足を合わせて後に縛り、高いところから吊るして背中に巨大な石を載⁶⁵（せる）。」

「……指を切られ膝を切断され額に十字の焼印をおされた⁶⁶。」

「小さな別の牢に入れ昼夜を分かたず太陽・雨・寒気に晒している⁶⁷。」

「両足の筋肉を鋭い竹で貫かれ、そのまま放置された⁶⁸。」

「十字架にかけて殺す刑はこの異教徒の間ではスペインの絞首刑と同じように非常に不名誉な刑罰であって、窃盗や追いはぎ或いは卑しい人々に用いられます⁶⁹。」

「山伏の頭は彼らが（キリスト教に）固執するならば石責めで殺す⁷⁰。」

「（雲仙岳の熱湯）の中に投げ込まれ⁷¹…。」

⁶¹ 前掲書、35ページ。

⁶² 『福者アロンソ・デ・メーナ 書簡・報告』、156ページ。

⁶³ 『福者ハシント・オルファナール、書簡・報告』、64ページ。

⁶⁴ 前掲書、68ページ。

⁶⁵ 前掲書、73ページ。

⁶⁶ 前掲書、74ページ。

⁶⁷ 前掲書、85ページ。

⁶⁸ 『福者アロンソ・デ・メーナ 書簡・報告』、200ページ。

⁶⁹ 『福者ハシント・オルファナール、書簡・報告』、135-136ページ。

⁷⁰ 『福者アロンソ・デ・メーナ 書簡・報告』、174ページ。

⁷¹ 『日本の聖ドミニコ』、394ページ。

「竹の鋸で頸を少しずつ挽かれ⁷²....。」

「殉教者の首が竹で高く晒されました⁷³。」

「多量の水を飲ませることであり、飲めなくなると口に漏斗をさし入れて水を流し込み、水を満たした皮袋か樽のように脹らむと、地上に彼らを置いて上に板を載せ、その上に二人の男がのって踏みつけると、その重みで口や鼻・耳・眼その他のところから水をことごとく激しい苦しみとともに吐き出す⁷⁴。」

「.....焼いた竹を爪と肉のさし込んで指の半ばまで突き通す⁷⁵」

「荒削りの竹を尿道に突き刺し⁷⁶....。」

「.....両足で吊るし頸を桶の水の中にいれさせ、窒息寸前に引き上げ(る)⁷⁷。」

「火縄銃の銃身で脛骨を押さえつけて全身を苛む⁷⁸。」

「水萱そっくりの細い竹製の錐で股に孔をあけて紐または藁縄を通(す)⁷⁹。」

「背骨を斬り裂き傷口に溶けた鉛を注ぐ⁸⁰。」

(14) 処 刑

古代、日本には首を切る、絞殺するなど多くの刑罰がありました。しかし、平安時代から仏教の影響で、刑罰が軽減されることとなります。死罪を申し渡すこともありましたが、天皇の命令で中止されたり、軽減されることがありました。鎌倉時代には、死罪には、唯一、首切りがなされるだけでした。しかし、江戸幕府は、キリシタンに対し、ありとあらゆる刑罰を用います⁸¹。

⁷² 前掲書、397ページ。

⁷³ 前掲書、397ページ。

⁷⁴ 前掲書、436ページ。

⁷⁵ 前掲書、436ページ。

⁷⁶ 前掲書、437ページ。

⁷⁷ 前掲書、445ページ。

⁷⁸ 『日本キリスト教史補遺』、203ページ。

⁷⁹ 前掲書、203ページ。

⁸⁰ 前掲書、203ページ。

⁸¹ 笠原一夫、日本の歴史、1992、木耳社、33-34ページ。

キリシタンに対する主な処刑方法は、火刑か斬首でした。火刑の場合、処刑人はキリシタンに苦しみを与えるために、遠くに薪を置き、小さな火で火刑に処しました。この時代、武士は、切腹をもって死に望みました。しかし、キリスト教徒の武士は、自害は許されませんでした。伝統的価値観に、多くのキリシタン武士は悩みを抱えることになります。例えば、武士であり殉教したレオンは、彼の処刑を前にして次のように語っています。武士の仕来りとしては、レオンは当然切腹するものと思われましたが、「私はキリシタンであるからしない⁸²」と答えました。

彼は、「今回、私が命令に従わないのは、武士の大名に対する義務や家来が殿に対して従うべき責任を知らないからではない。前に私は常にその義務を守って来し、出来るかぎり努力してきた。しかしそれは霊の救いの問題を知るまでであって、霊の救いを知ったとき、もはや人間の義務は通用しないし、霊が救われないのなら私はこの義務に従うことができない⁸³。」と言い、首を刎ねさせたと言います。

(15) 殉 教

ドミニコ会士の記録を読むと、同会の神父や日本人キリスト教徒たちは、イエス・キリスト⁸⁴、十二使徒⁸⁵の精神に殉じて殉教を遂げていったことが理解できます。同時に、ドミニコ会神父や日本人キリスト教徒たちは、南欧及びその周辺の聖人たち、具体的には、メリダのサンタ・エウラリア⁸⁶、カルタゴのシプリアーノ⁸⁷、パドゥバのサン・アントニオ⁸⁸、シエナのサンタ・カタリアです。サンタ・エウラリアは、スペインで最も有名な聖人の一人です。ディオクレシアノーのキリスト教徒迫害下、304年12月10日に殉教した聖女です。

カルタゴのシプリアーノは、3世紀初頭、北アフリカで生まれます。パレリアーノとシスト2世の迫害に対し、258年11月14日に殉教を遂げます。パドゥバのサン・アントニオは、ポルトガルの説教者であり修道士でした。1231年6月13日にパドゥバで殉教をし、1232年に列聖されました。シエナのサンタ・カタリアは、教皇庁のシスマを終わらせた聖女であり、「神の摂理の対話」を著しました。1380年4月29日に殉教します⁸⁹。日本のドミニコ会士たちは、この地中海周辺の

⁸² 『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス、書簡・報告』、28ページ。

⁸³ 『日本の聖ドミニコ』、147ページ。

⁸⁴ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、119ページ。

⁸⁵ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、106ページ。

⁸⁶ 前掲書、40ページ。

⁸⁷ コジャード、『日本キリシタン教会史・補遺』、44ページ。

⁸⁸ 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、40ページ。

⁸⁹ Quintín Aldea Vaquero, Diccionario de Historia Eclesiástica de España, C.S.I.C., Madrid, 1973. Gran Enciclopedia de España, 2003. 参照。

聖人たちに大いなる郷愁を感じていたのでしょう。

日本人キリスト教徒の殉教者たちは、当然、日本の封建制度と対立しました。ドミニコ会の日本布教史で最初の武士の殉教者は、レオンでした。レオンの殉教に対して、次のような記録が残されています。

「彼（レオン）の殉教は薩摩全土を非常に驚かせた。この地方では霊の救いに反しても、殿の命令に反抗することは許されなかったし、反抗を命ずる教えは領地を治めるためには不都合である、と言われていた⁹⁰。」

ドミニコ会神父たちは、多くの信徒組織を組織しながら、日本人キリスト教徒に「殉教の精神」を教授していきます。信徒組織の規則に従うと、「その会員は、誰よりも先に殉教を望まなければならない」ことが決められていました。ドミニコ会の神父の熱心な教えのおかげで、日本人キリスト教徒達は殉教の精神を学んでいったことは間違いありません。しかしながら、機微しい迫害や拷問に堪え切れず、棄教した信徒もいたことは事実です。

(16) 最後の言葉

ドミニコ会士の記録には、殉教者たちの最期の言葉が収録されています。ここでは、幾つかを紹介してみましょう。

アロンソ・デ・メナ修道士

「殆ど眼が見えないので、盲目のように書きます。神に祝福あれ。数多の知らせを聞いていますが、それはみな火刑、磔、拷問です。いつも私たちが祈っているように、イエズスとその御心の如く為し給わんことを。……私は台下および伴侶の方々が神への奉仕をやむことなく続けられることを願っていますが、神の知り給う最良の時まで捕らえられないために身を守られるように御忠告申し上げます。すべて神の御心のままにならんことを。伴侶の方々にくれぐれもよろしく。私は視力が非常に衰えています。良い眼鏡があれば嬉しいのですが⁹¹。」

村山アンドゥレース・トクアン

⁹⁰ 前掲書、149ページ。

⁹¹ 『福者アロンソ・デ・メナ 書簡・報告』、256ページ。

「尊師のことが原因で、いまわたしが神への奉仕を終わることを深く尊師に感謝いたします。マリーアとパブロを尊師にお委せします。神の御恵みにより天国に於いて、尊師のためにキリストと聖母及び聖ドミニコに祈りましょう⁹²。」(フライ・フランシスコ・デ・モラーレス神父宛)

一般のキリスト教徒

ミゲルの殉教

「イエズス様、マリア様。この苦しみがディオスの愛とならんことを⁹³。」

長崎の殉教者

「滅相もないこと、むしろ我らの望みは信仰のために死ぬことです。今我らの身に生じたような絶好の機会を台なしにすれば至極残念に存じます⁹⁴。」

(17) ドミニコ会士と日本人キリスト教徒の殉教者数

ドミニコ会に関しては、日本での殉教者数は57名でした。21人の神父、9人の修道士、27名の第3会のドミニコ会士でした。ロザリオの会の会員、イエズスの御名の会の会員、宿主、同宿、神父の世話人の殉教者数は、186名に上ります。

(18) おわりに

ドミニコ会士が日本に到来した時期は、迫害の嵐が激しく吹き荒れている最中でした。迫害での拷問は、まるで地獄絵を見るような有様でした。このような中で、日本人キリスト教徒はカトリックの教義を学び、ドミニコ会宣教師は彼らに殉教の精神を教え込みました。こうした殉教教育で、多くの日本人はイエス・キリストのために命を捧げることの尊厳を心の底に強く焼き付けていきました。ドミニコ会士は、イエス・キリスト、初期教会、中世期教会の記憶を心に留め、恐ろしい拷問にも耐え、殉教していきました。本発表を通して、ドミニコ会の殉教者たちは、古代から中世にかけてのスペインを始めとする地中海地域とその周辺の殉教者たちの精神性を継承しつつ、殉教の道を歩んだことが明らかになりました。ドミニコ会士とドミニコ会関係の日本人

⁹² 『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、208-209ページ。

⁹³ 『日本キリシタン教会史』、134ページ。

⁹⁴ 前掲書、287ページ。

キリスト教の殉教者数は、240名以上に上ります。その舞台となったのが、長崎及びその周辺地域でした。この殉教者の多さは、日本人キリスト教徒が、キリスト教の真の精神性を掴んでいたことの証となるでしょう。

(2016年10月27日 受理)